

風姿花伝第三、問答条々

一座敷を見て吉凶をかねて知る事

問。そもそも、申樂を初はじむるに、
当のぞ日に臨んで、先、座敷ざしきを
見て吉凶を予かねて知いる事は、
如何なる事ぞや。

(口訳) 問。一体、能樂を演ずる際に、その日その時に当つて、先づ見物席の様子を見て、その日の能の成功するか否かを予知するといふことは、如何なる事でありますか。

答。此事一大事なり。其道に得たらん人ならでは、心

答。これは非常に重大な事であつて、能樂の道に達得した人でなくては、容易にわからないものである。先づ、そ

得べからず。先^{まづ}その日の庭^{には}を見るに、今日は能、善^よく出で来べき、悪しく出で来べき、瑞相有るべし。是^{これ}申^{まうし}がたし。然^{しかれ}ども、凡^{およそ}の料^{れう}簡^{けん}を以て見るに、神事^{しんじ}、貴^き人の御前^{ごぜん}なんどの申樂^{しんらく}に、

人群集^{ひとくんじゅ}して、座敷未^{いま}だ静まらず。去^さる程^{ほど}に、如何^{いか}にもく^{しづ}静めて、見物衆^{さるがく}、申樂^{さるがく}を待かねて、数万人の心^{こころ}一同に、遅しと、樂屋^{がくや}を見る所に、時を得て出て、一声^{いっせい}をもあぐれば、やがて、座

の日の見物席の様子を見ると、今日は能がうまく成功するか、失敗に終るかの前兆が、きっとあるものである。これは所謂勘^{かん}で知れるもので、口では説明し難いものだ。しかし大体の見当をつけて見ると、神事能や貴人の御前演能などに於て、見物人が群集して、見所が騒々しいものだが、その中に、出来るだけ見所の静まるを待ち、見物人一同が演能を待ち兼ね、万人の心が一致して「未だ始まらぬか」と樂屋の方に注意を向けるその際に、その機会を外さずに出場して、一声をも謡ひ出だ。

敷も時の調子に移りて、万人の心為手の振る舞ひに和合して、しみぐとなれば、何とするも、其の日の申樂は、既善し。

さりながら、申楽は、御貴人の御出を本と為れば、早

く御出ある時は、やがて初

ずしては不^{かなはず}叶。さるほど

に、見物の衆の座敷、いま

だ定まらず、或は遅ればせなどにて、人の立居しどろにして、万人の心、いまだ能にならば、されば、左

しかしながら、能楽は、貴人の御臨席を基準として始めるものだから、貴人が早く臨席せられた場合には、見所

の空氣如何に拘らず、早速に始めなければならない。従つて、さうした場合には、見物席はまだ静まらず、或は遅ればせに入場する者などもあり、人々の立居も乱雜で、見物人の心はまだ能の方にに入れられるに到らない。それで中々容易に、しみじみとした境地になる事はできないものである。かやうな際の脇能に於ては、曲の人物に扮して出ても、常よりは色々とふりをも華やかにし、声も強く謡ひ、足踏をも少々音高く踏み、立ちふるまひの演技をも人の注意を惹くやうに活潑に演じ

右無くしみぐと成る事なし。さやうならん時の脇の能には、物に成りて出づるとも、日来より、色々と振りをも繕い、声をも強く使ひ、足踏みをも少し高く踏み、立振る舞ふ風情をも、人の目に立つ様に活潑と為べし。是、座敷を静めん為なり。さ様ならんに付ても、殊更、その貴人の御心に合ひたらん風体をすべし。されば、か様なる時の脇の能、十分に善からん事、返々有

なくてはならない。これ即ち、見所の注意を舞台に吸引して、騒々しさを静める為の手段である。尚、かやうに演ずる際にも、特に心がけて、貴人の御意に合ふやうな風体をすることが肝要である。従つてかやうな時の脇能は、十分にうまく成功するといふことは、到底あり得ないものだ。しかし、能は貴人の御意に召すやうにする事が眼目なのだから、この貴人の御意に合ふやうな風体にするといふことが肝要である。何といつても、見所がちゃんと静まって、自然にしみじみとして来た能には失敗はないものである。だから、見所の空気が能の方へ乗りかかつて来てゐるか、まだばらばらで散漫な状態にあるかを察知する事は、よほど能の道に長じた人でなくては、容易に出来ないものである。

るまじきなり。然れども、貴人の御意に叶へるまでなれば、これ感用なり。何としても、座敷の、はや静まりて、自らしみたるには、悪き事なし。されば、座敷の勢ひ・後れを考へて見人は、左右なく知るまじき也。

又云、夜の申楽は異わる事あり。夜は、遅く初まれば、定まりて湿るなり。脇の申樂湿りたちぬれば、そのまゝ

又一つ注意をのべると、夜の演能には、昼のそれとは全然異なる点がある。夜の能は遅く始まる時には、必ずめい、つて湿つぽくなるものである。初番の能がめいつたものとなると、その空気はいつまでもつづいて中中挽回出来ないものである。だから夜の初番能には、

能は直らず。いかにもく、

よき能を利すべし。よるは

ひとおとそうく人音騒々なれども、一声に

てやがて静まる也。然ば、

ひるの申楽は後が善く、夜の

申楽は指寄せし。指し寄り

湿りたちぬれば、直る時分

左右なく無し。

ひぎにいふ秘義云、抑、一切は、陰

陽の和する所の堺を、成就

とは知るべし。昼の気は陽

きなり。されば、いかにも

静めて能を為んと思ふ巧み

は、陰気なり。陽気の時分

十分に心して、善い能をきびきびと演ずるやうにしなければならない。夜はたとひ見所の人音が騒々としてゐても、一声をあげれば直ぐに静まるものである。だから、昼間の演能は、初番よりも後の方が見所が静まるから善く出来るし、夜の演能は、初番の方が善く出来るものである。夜能で初番能がめいつたものになつては、それが直る時といふものは容易には無い。

秘義に、「抑々一切は陰陽の和する所の堺を成就とは知るべし」といふことが述べられてゐる。昼の気は陽氣である。だからその昼に於ては、出来るだけしつとりと演能しようといふ巧をこらす、これ即ち陰氣である。陽氣の時分に、かく陰氣を生ぜしめるといふのは、陰陽を和合せしめる心であつて、これ即ち能のうまく成功することの第一歩であり、見物が面白いと感じるもとである。夜は又陰氣であるから、そ

に、陰氣を生ずる事、陰陽和する心なり。これ能のよく出来る成就の初めなり。これ面白と見る心也。

夜は又陰なれば、いかにも浮きくとやがてよき能を為て、人の心花めくは陽なり。これ夜るの陰に、陽

り。これ夜るの陰に、陽を和する成就なり。されば、陽の気に陽とし、陰の氣に陰と為ば、和する所あるまじければ、成就も有るまじ。成就なくば何か面白からん。又昼の中にも、

の演能は、如何にもうきうきと面白い能を演じて、見物の心が花やかに浮き立つやうになるのは陽氣である。これ即ち夜の陰氣に陽氣を和合せしめて成功へ導くのである。だから、若し、昼の陽氣に更に陽氣の演奏を以てし、夜の陰氣に更に陰氣な演技を以てしたならば、和合といふ事がないから、成功といふ事もあり得ない筈であり、又面白味などはあり得よう筈もない。又昼の中に於ても、時によつて、何とか見所もめい、つて淋しいやうな時があるが、かやうな時は陰氣の時だと心得て、湿っぽくならないやうに、特に注意して華かに演じる必要がある。昼間は、かやうに時としては陰氣になる事があるが、夜に於て陽氣になるといふことは、容易にあり得ないことである。

時に因りて、何とやらん、

座敷も湿りて淋しきやうな

らば、これ陰の時と心えて、

静まらぬやうに、心を入れて

為べし。昼は、かやうに、

時に因りて陰気に成る事あ

りとも、夜の気の陽に成ら

ん事、左右なく有るまじき
也。

座敷を予て見るとは、これ
なるべし。

見所の空氣を前以て察知するといふ
のは、この間の消息をいふのだ。

〔評〕問答条々は別紙口伝と共に、花伝書の中でも最も面白く興趣の深々
たる好篇である。年来稽古条々や物学条々を平素の軍事訓練にたとへる

と、問答条々はあたかも実戦の駆け引きに相当する。私はこれ等の章を読むと、観阿弥や世阿弥が如何にすぐれた軍師であるかを痛感され、彼等の率ゐてゐた大和猿楽、殊に観世座が、室町初頭の猿楽界に君臨したもの、もつともであると首肯させられるのである。

第一段は、演能の当日に於て、見所の空氣を察知して、その日の能の吉凶を予知する事を中心として説かれてゐる。これは能の道に於て通達した上手が、第六感によつて知り得るものであつて、何人でも望み得られるものではないが、その大体を、親切に解剖的に、比較的初心者に説かれてゐる点である。

能楽のやうな舞台芸術では、見物の注意を舞台へすつかり吸収してしまへない時には、その演出は必ず破綻を来す。その為に最も必要なことは、役者の芸の力量である。役者が下手では舞台は持ちきれるものではない。しかし、役者が如何に上手でも、舞台の外的条件に細心の顧慮が払はれてゐなくては、その芸は十分の真価が發揮出来ない。この段は、

外的条件への注意と臨機の処置を巧妙に説いて居る。花鏡で説いた「時節感当」は、この段に深い関係を持つ。

夜間と昼間との舞台や見所の気分の相違を説いた条は面白い。今日のやうな照明装置もなく、篝火で演ずる能などには、殊にこの感が深いであらう。只今のやうな照明があつても、夜能と昼能には、どこかに氣分の相違があるのである。これ等の気分の相違を、陰氣陽氣の二つに綜合して、一般的原理として説いた秘義の一語は、あらゆる場合に、演者の力量一つで千変万化の妙用を生ぜしめるものである。考察が科学的な表現でないからといつて、これを幼稚視する者があつたら、その人は自ら自己の幼稚さを実証することにならう。

猿楽の演奏は、結局、貴人の御意に叶へるまでのものだといふ考は、相當に注意して見なくてはならない。時代の空氣や貴人の愛顧如何が、一座の隆替に及ぼす勢力等を考へると、これは当時の猿樂者にとつては一の死活問題である。従つてこれ等の言葉を軽侮の眼を以てながめてはならないと思ふ。そればかりでなく、貴人は比較的高級な観賞眼を持つて、猿樂者を指導し、その芸を高級ならしめようとつとめた人々であ

つたのだから、その意に叶へる事は、能楽の幽玄化に於て相当な役割を演じたものである。今日の営利的なものが、通俗大衆的ならん事を欲して、芸術味の稀薄になることをも辞せないに比べれば、決して、猿樂者流が貴族の意を迎へたことを笑ふことは出来ない筈である。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著